

メンデルの一生

山本宣治



グレゴール・メンデル  
“今に見よ、俺の時が来る”

## まえがき

二十世紀の初年に三人の植物学大家コレニス Correns、チエルマック Tschermack、ド・フリース de Vries によつて再発見されたメンデルの遺伝法則は、近世の遺伝学の土台となり、其後二十有余年間にその学の研究並びに応用に偉大な発達を遂げた。即ち単位形質の法則、優劣の法則、分離の法則は、飼養家畜家禽や培養作物の品種改良や雑交に適用されたばかりでなく、人の配偶関係と遺伝の将来に迄或程度<sup>まで</sup>の予想を加えられる程の確かさを得るに至つて、現在の人間社会にも此法則の与えた波紋は非常に著しい。所で左の写真に現れた碑文にも「自然研究者教父グレゴール・メンデル（一八二二年生、一八八四年歿）

に捧ぐ、一九一〇年科学の友によりてこれを建つ」とあるように、世人は彼を純粹な自然科学者として敬意を払うて居るけれども、彼が存在中にはそうは認められて居なかつたことは、詳しくは次に述べる通りである。

彼の一生に関しては、最近ドイツで詳しい伝記が出版された（Ilits, Dr. Hugo : Gregor Johann Mendel, Wirk und Wirkung, Berlin, Verlag Julius Springer, 1924, 四二六頁、挿画五十九、挿図十二）。それを元に、米

の優生学者。パウル・ポープノーが解説したのが、近刊の『遺伝学雑誌』Journal of Heredity, vol. 16, No. 11にある。それに更に筆者は説明を添えて、彼の一生を偲しのびたいと思う。

世界大戦の前にはオーストリアの名で知られたヨーロッパ中央の一部、溫柔郷として才人シュニツラーの筆に描写された彼かのウィーンの都の真北の山地は、モラヴィアの名があるが、今はチェコ・スロヴァキア国の一部となった。そのモラヴィア山地の東北部、即ちドイツ、ポーランド及びチェコ・スロヴァキアの三国の境の相接する所に近い穏かな農村キューラントヘンの住民は、一部スラブ系と他の一部はドイツ系に属するが、いづれも牛を飼うて乳を絞りバターを作るか、又は果樹栽培を其業そのとして居った。

其地そのに少なく共第十六世紀の頃から住馴れた水呑百姓ながらも割に暮しもよい一族、即ちメンデル家があった。其家系そのを遡れば、疑いもない南ドイツ産で、或学者は其故郷そのをヴルテンブルヒだとも云うて居る。兎とに角かく一八六三年此方戸数七十戸を以て近隣に誇る小奇麗な村ハインツェンドルフに、此一家は住居を設けた。

扱さて我等の対象たるメンデルの両親のうち、父アントン・メンデルは一七八九年に生れ、ナポレオンの戦争の晩期にその戦いに参加して広い世間も見てきたが、祖先からの故郷に再び落着いて、一八一八年其その近くの一園芸家の娘ロシナ・シュヴィルトリヒと結婚した。母ロシナは一八二二年七月二十二日第二子たる男児をうんだ。此子が我々のヨハン・メンデルで、即ちメンデル律の名を以て其一族そのの名を不朽たらしめた其人そのである。

此偉人の一生に関して今迄我々の知り得た所は、殆ど昔話・お伽話おとぎばなしに類する些々ささたる事ばかりであったが、幸いにも最近彼が壮年・老年期の活動をなしたブリュンの町の住人、ドクトール・フーゴ・イルチスは、彼の一生に関して多年苦心蒐集した研究調査を発表した所は、もはや之以上将来何も残る所はあるま

いと思われる程で、彼存在中に教えを受けた生徒やそれから彼の甥二人の話もあり、チェコ・スロヴァキア国政府は此伝記の出版費の一部を補助した。

### 幼時と中学生活

彼ヨハン・メンデルの性格特徴は、やはり遺伝の方から説明のつくものが多い。即ち父に似て彼の身の丈は低かったが、肩幅も広くガツシリした体格を具え、波打った淡黄色の髪と灰青色の眼は北方種族の出たることを明らかに実証する。主に母方から継承されたのは頭脳の働きの方で、母方のおじの一人が苦学力行独学で一水呑百姓の子から其地の小学校校長に迄出世したことも、彼の人となりの由来を知るに一の参考資料となる事であろう。

近所の家は主に牛飼いであったが、メンデル一家ばかりは園芸を業として居たが、彼も幼時から自ずと植物栽培に熱中することとなり、一生その事を捨てなかつたのも当然である。なお彼が勤勉、忍耐、徹底の美德を具えて居たのも、小農の子にふさわしい特徴である。

ヨハンには一人前の園芸家になれる見込みもあり、父もそうさせたいと望んで居たけれども、もう少し世上に顔出しの出来る仕事をさせたいという母の主張に任せて、十一歳の時近くの小学校に入ったが、抜群ではないけれども相当の成績をあげ、その翌年トロブパウのギムナジウム即ち日本なら中学に当る学校に入った。

善良な学生たる彼の学資を払うのに、彼の父母の暮しは頗る貧弱であった故、学校の寄宿舎の室料も半額に免じて貰い、食物は現品を家から仕送って居たが、その食物すらも時々途絶えてしばしば彼は飢を忍ばねばならなかつた。

其内そのに家の暮しは益々悪くなり遂に何も仕送りもできぬようになり、一八三八年彼の十六歳の時から後二ケ年は全く自給苦学せねばならぬ事となり、平生は校外に労働に出で夏休みには家に帰って耕作の業にいそしんだ。

苦学の苦しみは激しかった。彼は屢々しばしば病床に倒れた。併しかし成績は常に級の首席を占めた。但ただし日本の修身に相当する「宗教科」の評点は「優、良、佳」の三段の末位「佳」にすぎなかった。真理に忠なる未来の科学者も中学の修身教師の御覚おんわ覚え目出めでたくなかった次第である。

一八四一年其その中学校を出てオールミッツ高等学校の哲学科即ち日本なら高校文科に当る所に入り、更に苦学を続けたが、病苦愈々いよいよ甚だしくして、二年目にとてもやり切れぬ所迄まで押詰あめられた揚句、教師になりたいという日頃の望みも目前に迫った大学入学も叶かなわぬドン底に到達した。

### 僧院生活の初期

其時その彼の師事して居た哲学の教師は、曾かつてブリュンの町の聖アウグスツス派の僧院に居たこともあるので、生活苦に悩む彼の急を救う一法として彼に僧職に入れとすすめた。メンデル自身は、自然科学ほどに宗教や哲学はすきではなかったけれども、背に腹はかえられず、終ついに一八四三年まず見習僧として其僧院に入り法名グレゴールを受けた。之が今でも彼の姓名の先頭に残って居る。

其頃そののブリュンはオーストリア第七の都会であり、知識上色々な活動も可成かなり盛んな所、其上そのその僧院が、中世紀には極くあたりまえであり其頃そのには段々珍しくなつた事だが、其地そのの学芸の中心であつた。そしてそこに居る人々も、無学やお有難屋ありがたばかりでなく、文芸科学の道にたけた人々もあり、又世に名ある人々も居つたことはメンデルにとつて幸福であつた。殊とにその僧院の長は勢力手腕共に勝すぐれた人で、すぐにメ

ンデルの人となりを見破して、直接衆生済度のため善男善女に接するのに適任でないことを認めた。なおメンデル自身も病める者、悩める者の枕辺に侍して有難い御教えを諄々と説くのは自分が病む程につらい務めであったのである。そこで寛大な僧院長は、此男は自然科学の研究に興味もある相当見所のある人間だから、僧院附属校の教師にしたらよからうとの方針で、彼メンデルを用い奨励したが、併し矢張神学の修業を御免蒙るわけには行かなかつた。いわば否々乍らやったという形で無論伝道上の熱心などにも欠けて居た。僧侶として出世した後々迄も、彼は政治上自由主義者として教会の神聖政治や儀式三昧には大して敬意を有して居なかつた。そして或時などは、其地方巡教中の或大僧正のことをば、どうせあれなら頭脳よりも脂肪の方が重いからえらいのだろうと批評したため、不謹慎の廉で戒勅されたこともある。

間も無く彼は近くの中学校で物理学担当の代用教員となつたが、教師の間でも生徒の中にもじきに受けがよくなつた。併し無免許教師のことだから、それを得るためにはウィーンの大学へ入つて後教員検定試験を受ける必要があつた。受けて見はしたものの一度ならず二度もマンマと不合格のうきめを見た。余談乍ら我国の生物学界の大先達の一人、丘浅次郎博士は今の一高の前身たる大学予備門に在学中、日本歴史の試験で賤ヶ嶽七本鎗（賤ヶ嶽の戦で名をはせた加藤清正・副島正則・加藤嘉明・平野長泰・脇坂安治・糟屋武則・片桐且元の七人の総称）の内五本までしか覚えて居なかつたため、矢張メンデル同様に名誉あるすべり方を示されたこともある。鎗が二本たらず共、丘博士の声名は傷つけられることはない。また終生無免許教師であつたとて誰もメンデルを軽蔑するものもあるまい。

つまり彼メンデルの学問のやり方が、これ迄適当な本を選ぶ便宜も無かつたので、徹頭徹尾我流であり、断片的の学殖にまとまりがついて居なかつたのだ。但し其時の答案の中に現れた面白いことは、其年一八五〇年、即ちダーウイン『種の起原』出版の九年前、既にチャールス・ライエルの説いた地質学上の進化的見解をば、彼メンデルは受入れて居たのである。何にせよ、その青年僧侶に正式の教育が必要な

ことが明らかになつたので、僧院は彼をウィーン大学に入れて特殊研究をさせるように然るべく取計うたが、大学で何をしたか、兎に角相当の研究はしたらしいが、大したこともわからぬ。但し或時富くじを買つて奇利をねらうたこともあると彼自筆の手紙にもある。

因みに彼の賭博癖は既に子供の時からあつたらしく、少年時代にラテン語の練習帳の余白に、学友とやったサイコロ遊びの点取表が書込まれてあるものが残つて居る。理学博士三好学先生の語によると、メンデル程の偉人がそんな下等な戯れをやつた筈はないのであるけれども、メンデル律の基礎となつた実験が数学の蓋然論(確率)を多く参酌して居る所から見れば、サイコロ遊びの一六争いや富くじ買ひの上品下等の論はさておき、順列組合せや其他プロバビリテイ(率)の問題で、可成彼の天才の頭脳を練つたものに相違ない。山カン根性といへば世間体も宜しくないが、蓋然律という高等数学の蘊奥を極むべく頭脳を鍛えたといへば、敬意を表したくもなる。表現はどうでもよい。富くじを買つたことは本人が報告して居る事実なのである。

やがて彼はブリュンに戻つて、工業専門学校の助手に任命され、十四年間勤続した。此間が彼一生の中で最も幸福な又最も收穫豊かな時であつただろう。学生連が彼に親しんだに違ひ無い。誰も彼の教えを受けた人達の異口同音に語る所は、彼の講義がわかりよく秩序整然たるものであつたこと、又生徒が教室外でやる研究を助けるのに頗る熱心であつたことである。教えたのは動物学、植物学、物理学であるが、弟子の中に将来それらの科学の研究を専門とするものが多く現れたことを見ても、彼の教授が科学に対する興味を喚起するに力あつたことがわかる。

## 生物学者及び教師としてのメンデル

彼はブリュンの僧院に二室を占め、之を自然研究の実験室とした。客がそこに入って発見するものは、数多くの籠で、鳥も居れば、灰色の二十日鼠もはねて居る。馴ならした狐も居れば山あらしが居た事さえあつた。園には彼の蜜蜂と花と果樹があつた。温室ではパイナップルを培養した。又其その近くにはそよ風にもたえなる音を立てて鳴るエオリアンハーブ即ち風琴を設けたりした。

一八五六年彼は教員免状をとるための受験にウィーンに出掛けて行つた。そこでどんなことがおきたか、今なお判明せぬが兎とに角かくブリュンに戻つてきた時には頭はグルグル縋ほうたい帯まき、ガツカリした体ていで又失敗したというて居たとのこと。なお一説によれば、其時そのの試験官たる植物学の教授に議論を吹掛けた揚句あげく、終ついに格闘を演ずるに至つたとか、伝えられて居る。帰つてもなお講義は続けはしたが、結局無資格だから、終り迄職名は助手に過ぎなかつた。

其頃その既に彼は種々な方面、就中植物に重きをおいて、秩序整然たる実験を始めて居た。その多くは何であつたか、時々ふと彼の仲間に告げた短かな話から僅かに手掛りがつく位の程度で、例えば或毒草を繰返し移植を続けると、其毒その性が減ずるといふことを、生徒の前に実験して見せたこともある。又屢々友人と種の起原の問題を論じたこともあり、諸種の雑草や花を植換えて見て、果して環境の変化が永久的変異をもたらし得るかの問題にとりついて見たこともある。なお数年間毛茛もうこん（うげ きんぼ）科の植物ラヌクルス属の中の園芸品や野生諸種を培養比較して見て、野生種が園芸品に段々似てくるかを調べたが、一向にそんな変化は起らなかつた。或友人に漏した句に「新種を造るのに自然はこんな進路を選ぶのではない事が私にはわかつた。何かもつと他の事がそこには存して居る」。

ダーウィンの著書が次々に出版されたが、天主教会はそれを神威冒瀆ぼうとくの危険文書として読むことを禁じたにもかかわらず、彼は一部残さず買入れて一々熱心に讀んだ。その結論には大体賛成だと同僚に云うた



そうだが、併し<sup>しか</sup>ダーウインの自然淘汰説にはなお多少足らぬ所があると考へて居た。今現に其<sup>その</sup>僧院にはメンデル自身の書きこみのあるダーウインの著書が、他の科学書と共に保存されて居るが、その買入れの標準<sup>てあか</sup>や手垢<sup>てあか</sup>の跡から見ると、彼の読書の範圍は当代の科学的名著を全く包括して居るけれども、文芸作品には全く及んで居ない。但し<sup>ただ</sup>音楽や美術には多少趣味はあつたかも知れぬが、兎<sup>と</sup>に角<sup>かく</sup>彼の傾向が全く科学的であつたことがわかる。

彼の有名な碗豆<sup>えんどう</sup>の雑交実験の由来はわからぬ。併し<sup>しか</sup>彼の大学生活の初年に或学会に提出した論文に「碗豆の一害虫について」とあるから、可成<sup>かなり</sup>前から之を実験材料として居たこともわかる。なお此虫が後に及んで彼の雑交試験中の碗豆<sup>えんどう</sup>を殆ど<sup>ほとんど</sup>全滅させる程の害を生じたのも、思い合せて見ると面白い因縁である。ドクトル・イルチスの考へついたことであるが、単位性質の分離現象は既に二十日鼠<sup>はつかねずみ</sup>の掛け合せで確かたに相違無<sup>な</sup>かるうが、鼠の近親交配の結果で遺伝法則を押し立てたとすると、有難<sup>ありがた</sup>屋<sup>や</sup>の同僚達が、例の風教問題で兎<sup>と</sup>や角<sup>かく</sup>云うに違<sup>ちが</sup>ひない。メンデルは早くもそれを見越して無難<sup>えんどう</sup>な碗豆<sup>えんどう</sup>という植物を利用したのである。成程<sup>なるほど</sup>前には某大僧正の頭と脂肪を評したため、お目玉を食うた彼の上に、矢張<sup>やはり</sup>その目玉が光つて居ることは、彼も重々承知の上だとすれば、之もさもあるべき用心であつた。彼の園は奥行三十五メートル、幅七メートル、約七十余坪<sup>つぼ</sup>（約二三〇平方メートル）の極く狭いものであつたことは有名だが、訪問客が彼の室を訪うと屢々<sup>しばしば</sup>「さあうちの子供達をお目に掛ける必要がある」と独身の誓<sup>ちか</sup>いをたてた僧の冗談にびっくりさせられた。何の事かと驚いた客が彼の案内のまにまに其<sup>その</sup>小さい園に導かれると、そこに碗豆<sup>えんどう</sup>の蔓<sup>つる</sup>が四方八方に延びて居るばかりであつた。

## 記念すべき実験

此永遠に記念すべき雑交試験は多分一八五四年に始まつたらしいが、此事ばかりに熱中して居たのでなく、一方毎日氣象観測を行い、死ぬ数日前迄それを継続して居た。又彼の蜜蜂は単に土着の飼蜂ばかりでなく、野生蜜蜂やカリソスイア種・イタリア種・エジプト種・サイプラス種もあり、各巣箱の傍には記録札があり、他日雑交試験の時に役立つ色々の事実、例えば新女王蜂孵化、分封、雄蜂の飛んだ時の日付等が、順序正しく記入されて居た、此蜜蜂試験で一体どんな事を研究しようとしたのか、不幸にして其記録は全く保存されて居ない。

植物の方では豌豆を主として長く扱う以外、ヤナギハタンポポや其外約三十属に迄実験材料として培養したと、植物学大家ネーグリ宛の手紙の中にある。

今残つて居る彼の手記を見ると、徹頭徹尾昔風の自然愛好者であり生れつき植物ずきであつた彼の面目躍如たるものがある。一寸山野跋涉に出掛けても面白い草木が目にと留まると、すぐ掘起して持帰り自分の小園に植込む。或年イタリア旅行でフローレンスでふと食べた葡萄がうまかつたので其種を持帰り実生葡萄を仕立てたのが現在でも実つて居り、又一枝を携え歸つた三好博士は之を東京小石川植物園に植え、メンデル葡萄は垣根に仕立てられて繁茂して居る。

やがて其中に僧位も昇つて僧正格となつてから、一層その植物ずきの好みも十分に満足させる事も出来、僧院内の敷地管理で思ふ存分果樹を植込みもした。其頃彼が芽つぎ割つぎした果樹にはG・Mの頭字を入れた鉛札が下げられて、今も尚そこに繁茂して居る。其僧院の園丁に聞くと人工受精で雑交させた新種の実生から約五、六百本の接木を彼は仕立てたとの事、なお其外手作りの蔬菜を土地の園芸共進会に出品したり、其審査員にもなつて見た。或時其僧院の面々記念撮影の節はフクシアの鉢を小脇にかかえた彼が、顔を出して居る。

なお其地の養蜂者協会の一員であり、又久しく其会の副会頭ともなり、其後その僧院長になってから後でも、ドイツ養蜂家協会全国大会に列席するため、態々キール迄も出掛けたこともある。

生物学に関する興味はなお人にも及び、彼はブリュンの旧家について遺伝を調査したり、彼の甥二人の人類学的計測定を定期にやったりした。

### 僧院長として多方面な生活

斯く此一僧侶の好んだ科学研究と教育の活動生活とは、一八六八年彼メンデルが選挙によつて其僧院長となつて終に其継続を妨げられた。彼の如き不羈自由な博物学者で素性も卑しく又政界にも教界にも無名の士が、僧院長の如き枢要の職に選まれるとは、一見頗る不穩当らしく思われるだろう。實際僧院長の職といえ、日本でならまず一宗派の管長にも匹敵する程に、公私両様の諸種の義務と特権が附随し、其勢力軽んずべからざるものがある。

然るに当時、選に当る候補者の数は僅かに十二名、其中でメンデルは第一に敵が一人も無い上に応援する友人も多し、其上に候補者の中で彼が最も年少であつたのが其選に入つた主な理由である。つまり当時既に政府は僧院長更迭の度毎に其継承登録に重税を課するものだから、余り老年者を任じて間もなく死なれると、新任の度毎に僧院が痩せるというので、同じ更迭でも若いのが後釜に坐れば永持ちがして寺のためにもよいという内幕からであつた。

斯くして元は田舎の一少年、教育を受けたくても金が無いから、余儀無く里から寺へと転り込んだ昔の一沙弥(僧のこと)が、今じゃ全国に金持ちの名も高い一財団の棟梁となつた。すんでの事で一生百姓に埋れ掛つた彼は鳥と動物と同居の小さい二室から出て、高価な家具を据附け、壁には名家の古画を掲げ、床に

は貴い石木を鏤め敷いたおよそ四十の広間を有する宮殿に移り住むこととなった。中学生の頃には屢々食も食えぬ飢に悩んだ当人が、全ヨーロッパで殊に料理の美味を誇るオーストリアの中でも庖厨の完備とコックの腕前を誇る僧院のあるじとなつた次第である。教員免状も終に手に入れなかつた、いわばモグリ教師たる彼、即ちまだ年も若い助手は其学校で別辞も述べずに去つた。去る時校長に云い残した事は、最初の月の俸給を弟子の中で成績優等の貧生三名にわけてくれとのことであつた。

其後の彼はモラヴィア各所にある寺有財産の管理に忙殺されたが、同時に其要職につき物たる余禄を十分享樂もした。二人の甥をブリュンに呼寄せて医師志望の勉強もさせた。請わるるままに色々な慈善事業に寄附金もした。又個人としては冷淡であつた文芸、音楽、美術に対しても氣の大きいパトロンとさえなつた。

殆ど毎日のように彼は名士を招待して会食し、日曜午後は其宏壯な邸を有力者の前に開放した。こんな豊かなくらしは、彼の家系の遺伝の肥満性を刺戟助長することとなり、メンデル大僧正は日ましに太る一方であつたから、どうかしてやせたいものだと、寢室の床の上でゴロゴロ転げ廻つたり、朝四時に起床して執務を始める元の習慣を復活させたり、液体食料を主とする献立を採用したり、殆どあらゆる手段に訴えなければ、徒勞に歸した。

夜は屢々将棋に似たチェスの戯れを楽しんだ。此事は前に私が申したと同じように英のベートスンも、彼の心的過程が数学的性質を具えて居ることにふさわしい事だと至極上品に表現して居る。

寺領各地の見廻りに随分の時日を彼は費したが、留守中屢々彼の愛する植物が枯らされたり萎びたりすることもあつた。何しろ出身がつつましい貧農であるから、其僧院の財産管理には仲々よく氣がついて、管理者として至極適任であつた。そして余裕も豊かだから、思うままにローマやらヴェニスやアルプ

スや、二人の甥を伴うて一八七三年ウィーンの博覧会見物に出掛けたり、さては英国くんだり迄遊覧に出掛けたらしい。

彼の公生活の仕事は益々多くなり、其他俗務多忙でとても研究など落着いてやる余暇もないという始末、農業奨励やれ教育それ地価修正などと色々の委員会の官選委員になるは、盲啞院長になるは、一八七六年国立勸業銀行の総裁となつて、週の幾日否殆ど毎日午前十一時から開く重役会議に列席するという風の大掛りの活動に迄及んだ。どこへ行つても彼は掛換への無い手腕家として事実に対しては飽く迄厳正、其行動は簡明直截、そして頭脳明晰、徹底と忍耐力で頗る重んじられたものである。無名青年の虐待の時代に比べてなんと其変りが激しいものだ。彼は其時の勢力と活動とを生き甲斐ありとして楽しんだというのもありそんな事だ。絶えず彼は研究の事を口にして、昔からの実験も続けられぬことを苦にしたり、新しい実験の計画の話もしたが、それらは漸々彼の生活から離れ去り、死の前迄続いたのは氣象観測ばかりであつた。

### 晩年の政治的活動

六年間かくも權威にみち豪華な生活の過ぎた後、一抹の黒雲とも見るべき一事件が突発し、彼の死の前の幾年かが暗澹の中に陥る前兆となつた。メンデル大僧正自身は政治的に活動はしなかつたけれども、籍はドイツの自由党においてあつたが、その自由党は其年、諸所の大寺院の会計の中の積立余剰金を流用して、国教たるローマカトリック教の日々の勤行供養式の執行維持費にあてようという新法案を、議会に提出した。多分其法の目的は触れ出し通りであつたらうが、兎に角一大ぬけ穴がそこにあつた。各僧院は或定まつた入費維持費にあてる金額を積立金から出すなら、歳入はかくかく歳出はかくかく、差引あます所

はなしと帳面をととのえさえすれば、金持寺でも国庫に貯金を巻上げられる心配は無い。それで宗教家の中でも如才じょさい無い連中は色々策を講じて、兎も角かく立憲的でもそんな苛税を免れようと抜け路を通って切抜けた。日本では金持が法学士を雇入れて合法的脱税を専門に研究させ、保全会社などと怪しからぬ企てを工夫するとやらの話であるが、西洋では有難い御教えを説く坊さんが矢張りやはりそんな事をせられる末世じゅうき繞季の沙汰さたであるが、併しひが学僧メンデルは断乎としてそんな妥協やゴマカシを退けて、新法にマッコウから反対するべく運動を始めた。

かくムキになった事はつまりそんな仕事は彼の柄にない事だという事を示す次第、即ち彼メンデルは科学者であつたが、うまれつきの僧侶や外交家でなかつたという訳である。猶なほ彼の友人は、此反対は彼の正直一方な非妥協的な天性によるのだといい、敵になる方からは、余り彼が出世し過ぎた結果自惚うめぼれが頂点に達して気がヘンになつたためだというて居る。何にせよ彼はその新法を久しく無視して居た。そしてもはやそれも不可能となつた時、彼は憲法を楯にとつて当るを幸い長論文の八つ当りで、大車輪の奮闘をした。其中そのうち彼に与した輩も段々彼をおきざりにして政府と和を講じた。併ししか彼は少しもたじろかず反対を続けたが、政府は訴訟を提起し、ブリュン僧院に属する不動産の一部を差押えた。彼はすぐその差押物件を換算した額を帳簿に記入し、債権について還付期日七分の利子を政府に要求するのだと云い張つた。

彼の宗派の財源たる所領は、斯くして段々に政府に没収された。頑強な大僧正は毎回長い抗議を發表したが、其その反抗は抵抗もできぬ権力と動かすべからざる相手に対してであつた。世人はそろそろ彼が正気か否かを疑い始めた。そのささやきは彼の耳に入ってくる。彼はそれに対して嚙かんで吐出すように、俺の反対者共は俺を狂人扱いにし、やがては殺す積りなのだと云い放つて、うるさい人にあうのもイヤだとばかりに引込んで、甥二人相手に何か戯れに鬱を晴らして居た。僧院の中の空気も険悪となつて、衆僧も彼に

反対し、他の僧都達も彼の精神状態について内々注意するようになってきた。彼自身は、皆の者がたくらんで俺を癡狂院（精神病院）に幽閉しようとしてるといふし、一方政府の方では何かの手段を僧院の方で講じたがいとすすめた。

併しとうとう一八八三年の中頃に至ってメンデルは其僧院の俗務全部を一人の執事に一任して引込んだから、別に何の手段を講ずる必要も無かった。其件は彼の死後二週間の後、彼の同僚は政府当局と妥協し、新法を承認すると共に没収積立金の還付を請願することによって、結局政府は威信を保ち僧院は金を保つことで永年の係争は落着した。

### 悲惨な臨終

一八八四年一月六日終に彼は四面楚歌の裡に此世を去った。死因は心臓組織の疾患、腎臓病、水腫病、併せて尿毒症であった。生前飽く迄真実を追求した彼は、死後に迄も其追求を断念しなかった。即ち自分の遺骸について解剖を行い、真の死因を突止めてくれとの頼みによつたのだが、もう一つ反対派の奸策によつて生き乍ら埋葬されぬようと幾分用心の意味も含まれて居たのである。

晩年の彼の精神が異状を呈して居たかどうかの問題に答うることは困難である。彼は彼の系統に精神病者はない、又死の前に親しく彼に侍した彼の甥兩人共に医師であるが、何もそんな狂人と見るべき徴候は無かつたと確信をもつて断言してる。但し多分遺伝性からきたらしいプライト病に悩んだこともあり、又一日に葉巻煙草二十本宛も久しくのみ馴れて居たのだから、或種の中毒で彼の精神に何かの攪乱が起つたと考へても至当である。

葬儀の後、彼の同僚は相集つて彼の遺稿全部を調べ、製本ずみの本だけは僧院の書庫に納め、他の原稿

手記のたぐいは全部焼棄やきすててしまつた。即ち彼の独創的実験の記録は殆ど全部は消滅した。跡に世に残るは唯二種の既刊短論文だけであつた。

### 死後の再発見

人は去り、人は来る。今を去ること八十年の昔、一八六五年メンデル四十三歳の時三月脱稿した「植物雑交の実験報告」は、中欧の田舎町ブリュンの博物学会会報に載せられたが何等学界に反響を惹起ひきおこすことも無かつた。原著者の請求にかかる四十部の別刷が彼の署名を添えていかなる大家に献じられたか知る由もない。併しかし当時の植物学大家ネーゲリに批評を求めた彼は、「此研究方法果して当を得て居るか疑わし」という意味のすげない答を得た丈だけである。

彼は生前、忠実なる教師から始まつて頑固一徹の老僧正として世を終る迄、誰もそんな科学者だとは知らなかつた。併しかし側に侍しした者の報ずる所によれば「今に見よ、俺の時がくる」とつぶやいて居たさうである。果して其時そのがきた。劈頭へきとうに述べた通り、論文発表後三十五年、著者の死後十六年にして、所を異にしてしかも申合せもせずメンデルの実験と同じ試みに熱中して居た三人の植物大家コレンス、チエルマック及びド・フリースは、殆ど時を同じうして此片田舎の僧侶の驚くべき実験報告をどこかの隅から探し出してきて世界に公けにした。其時そのの手掛りはどうであつたか。東大教授藤井健次郎博士の直談によると、再発見は此三名よりも園芸学の老大家、米国コーネル大学教授エル・ベイレイらしいとのことである。その順序はどうでもいい。兎とに角かく宝玉は荒野から掘出されて、今や其光そのりは世界を照らして居る。

### むすび



幸いにも斯く再発見されたからこそ、我等二十世紀の者共はメンデルの偉大さを味わい、其後二十有余年間に長足の進歩を遂げた遺伝学に感謝することができる。併し単にメンデル律三法則のみならば、メンデル現れず其後の三学者なり誰なりが発見したに違いない。併し彼が独創の才を発揮して不利な環境にあり乍ら、かくも画期的発見をした位であるから、そんな片田舎の僧院長に終らずに、初期の研究を携えてベルリンなりパリに出て純科学的雰囲気の中に其事業を進めて居たならば、我等の遺伝学の進歩は更に少なく共三十年以上、其歩みが前進して居ったかも知れぬ。

「かも知れぬ」「こうもあつたらう」という嘆きは、屢々愚かな我々の漏らすつぶやきである。メンデルが銀行頭取であつたとて、又時の政府当局者ともみあう末に悶死したとて、実の所我々には興味本位の好奇心以外に、大したかかわりが無いように思われる。ブリュン僧院の世襲財産が無かつた方がもっと落着いて花いじりが出来たかも知れぬと色々の想像を廻らし仮定を設けると、人一生と環境との關係について色々宿命論的な考えが浮んでくる。併し空想の翼をいかに働かせてもそれは終に暇な余りの戯れだ。唯彼メンデル一生の浮沈の跡を顧みて、筆者の特に痛感する事は、我々俗人は常に偉人をば存在中に苦しめておき乍ら、死後に初めて彼の十字架を拝し、或は彼の偶像を建てることの愚かさである。お国自慢にチエコ・スロヴァキア政府が伝記出版に国費補助をするのも当然だ。我々後進の学者や彼の渴仰者が醜金して記念像を建てるのも悪くない。

併しもう一つ彼の一生と其天才の表現について、人類社会の大局から見れば、実に惜しいことである。我々は記念祭の宴会費と記念像の建築費とを節約して、其当人の存在中に何とかできなかつたのか、生けるメンデルをいびり殺しておいて、死せるメンデルを祭り記念像を建てるのは、一方から見れば、前日の不明を悔いて罪ほろぼしのための気休めの沙汰とも考えられる。

と考えると、我々は此むすびに於て、今後うまれ来るべき幾多のメンデルやダーウィンに対して、死後の記念碑とその追悼会を更に節約して、彼等の短い一生を有効に利用さすよう、天才の社会的機能を發揮させねばならぬと附け加えていいたくなる。猿まねと一括される日本人の中にも探せば将来のアインシュタインやメンデルの卵もそこに発見されるに違い無いから。

(一九二六、三、二七)。

- 「メンデル伝」（山本著、『山本宣治全集』第一巻、汐文社、一九七五年二月）所収。
- 旧かな遣いは新かな遣いに、旧漢字は新漢字に改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- 理解を助けるために割注をつけた。
- 外国の地名はなるべく通行のカタカナ表記に改めた。
- PDF化には`ETEX 2ε`でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、  
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>